

国府遺跡発掘と道明寺天満宮

南坊城 光興

道明寺天満宮宮司

道明寺天満宮には、「国府遺跡発掘一覧表」と題する記録が残されている。字体から筆者の曾祖父南坊城良興のもので、国府遺跡で行われた10次の発掘のうち9次が記録されている。発掘責任者、発掘地点や発掘品、発掘期間も記されている。さらに「一覧表」には「備考」として「本表ハ見聞ノ概要ニ付詳細ハ其発掘者ニ就テ問合サルベシ」とあることから発掘の見学についての記録と見間違えるかもしれない。しかし後述するように良興が発掘に携わっていたことから、実際の記録と考えられる。発掘時期が前後すること、日数が正確でないことなどから、発掘時に書き綴ったものではなく、発掘後に思い起こすように整理記録したのではないかと推測される。

良興は慶応元年に生まれ、明治5年道明寺天満宮と道明寺の神仏分界に際し、南坊城家を興こした梓子の養嗣子として南坊城家に入った。良興は泊園書院（関西大学図書館にある泊園文庫はこの泊園書院の蔵書本を寄贈されたものである）に学び、第3代宮司（当時は社司）として道明寺天満宮の発展に寄与した。良興が考古学について学んだかどうか明らかでないが、書架に多くの考古関係の蔵書を確認できる。国府遺跡発掘以前に濱田耕作氏や本山彦一氏と面識があったか関係ははっきりとはわからない。

発掘時のことを伝え聞くとところによると、発掘隊は道明寺天満宮内にある良興邸に宿泊していた。国府遺跡から良興邸まで徒歩で約10分くらいであること、当時は周辺に宿泊施設がなかったこと

などから、一覧表に記される9次全ての発掘で宿泊していたのではないかと推測される。道明寺天満宮では当時の記録を他に見出していないが、大正8年4月の調査の時に発掘隊に加わった東大在学中の川村真一氏の回想録がある。「特に本山先生の御厚意によって、その発掘隊の宿舎たる道明寺天満宮の南坊城良興氏方に宿泊した。」（『松陰本山彦一翁』）とある。

当時の大阪毎日新聞を見ると発掘時の様子が詳細な記事として掲載されている。大正6年6月、第1次の発掘には京都帝国大学濱田耕作助教授（当時）の指導により発掘が進められ、人骨など多くが出土した。紙面上に濱田氏はその成果とともに「本

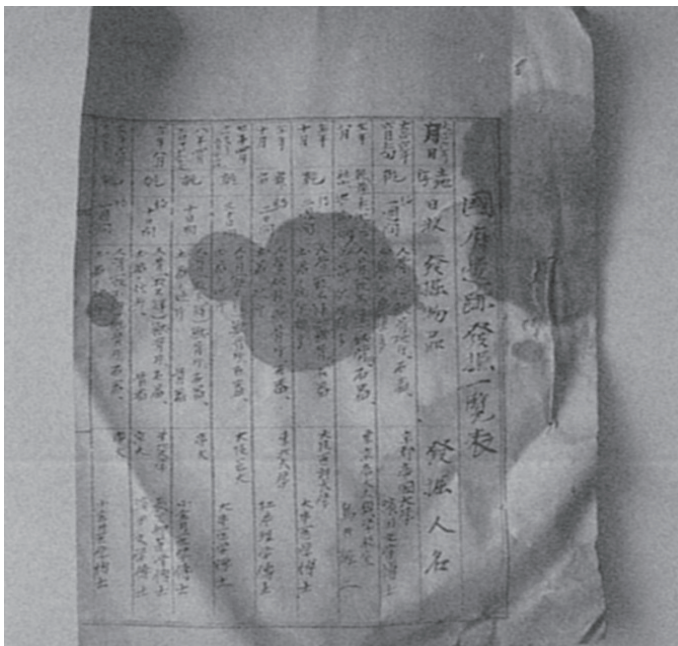


写真1 国府遺跡発掘一覧表 道明寺天満宮蔵

山彦一君、南坊城君等にも御礼を申述べて置く。」と文章を寄せている(6月10日付)。京都帝国大学の第2次発掘では、調査地には大勢の見物者が押し寄せたようで、贗造石器が売買されていた。

発掘には本山彦一氏の後援により「鳥居(龍蔵)、福原(潜次郎)、田澤(金吾)、南坊城氏息良修の四氏」が携わったことが記され(8月16日付)、翌17日付には「鳥居氏を主として田澤、南坊城良修の両君」が国府の遺跡を発掘し、富田林の喜志遺跡を「南坊城良興氏を主として次男良昂(卓)君」らが発掘調査したとある。これら調査時の大正6年には長男良修は24歳、次男良卓は16歳であった。さらに翌18日付には、本山邸で「収集品の大整理」をしたことと、これには良修が参加したことも併せて記されている。また現八尾市の恩智の遺跡についても良興が案内したことも記され、他の場所の発掘も同時に行われていたことがわかる。

この後の発掘についても、良興らの参加が窺える。つまり良興親子は宿泊場所の提供だけでなく、長く発掘調査にも携わっていたことが明らかである。物心両面の協力に対して、本山彦一氏は、玦状耳飾一対を含む国府遺跡出土品の一部を、御礼の意味も込めて道明寺天満宮に寄贈し、これらは今も天満宮の宝物殿に展示されている。余談ではあるが、喜志遺跡は筆者の祖父良卓が発見した遺物を契機に調査されたと聞いている。

また発掘期間中には少なくとも二度、人骨の法要が行われていることがわかる。大正6年10月10日と大正7年5月4日、道明寺の六條照傳尼が比丘尼二、三人を供して読経供養を行い、良興を始め発掘に携わった人々が参列したことも併せて記される。

最後に発掘隊が良興邸に宿泊中の逸話がひとつ伝わっているので紹介しておきたい。牛が天神さま、すなわち天満宮のご祭神菅原道真公のお遣いとされていることから、南坊城家では、境内で牛肉を食べてはいけないことになっているのだが、境内にある良興邸に宿泊していた発掘隊が、牛肉ですきやきを食べてしまったことがあったそうである。その時に良興が大変叱責したことはいうまでもない。



写真2 法要の様子 道明寺天満宮蔵